津波防災伝え200回

宮古商工高 22日実演会

from 3.11 東日本大震災10年

学校統合後も継続

教え子世代「先生」に

自前の津波模型を使い、小学生らへ避難の啓発を続けている宮古市の宮古商工高（菅原一志校長、生徒517人）機械科津波模型班は22日、200回目の実演会を開く。宮古工高時代の2005年から始め、東日本大震災では「おかげで助かった」という住民も。本年度は学校統合、新型コロナウイルス禍などにも対応して活動を重ねてきた。震災10年を前に迎えた節目。幼少期に命を守る教えを受けてきたメンバーが、先輩たちの思いを胸に「防災のバトン」をつなぐ。

宮古市赤前の工業校舎実習棟。22日に同市の鍬ケ崎小で開く実演会に向け、機械科3年の6人が津波模型を組み立てる。元実習教諭の山野目弘さん(68)の指導を受けながら、当日の動きや注意点などを確認。山内流星さんは「小さい子にも分かりやすいよう、言葉を選びながら伝えたい」と意気込んだ。

宮古工高時代の同班OBも駆け付け、後輩たちの動きを見守った。震災前の09年度のリーダーだった山田町山田でうどん店などを営む川村将崇さん(28)は「山野目先生から、生きている間に絶対津波は来ると言われていた。震災は『まさか』じゃなく『やっぱり来た』だった」と振り返る。

実演では、入浴剤で赤い色を付けた「津波」が、約2㍍四方に縮尺された町や家々をのみ込む。子どもでも一目で津波の恐ろしさが分かる仕掛けだ。川村さんは「いまだに（津波模型を見た人から）『おかげで助かった』と言われる。大地震はまた来る。模型班をやっていて良かったと思えるよう頑張ってほしい」と後輩に熱く語りかけた。

震災の年に宮古工高に入学し、13年度に活動した同市茂市の会社員荒矢芳楠さん(25)も「当時は全員が『津波の恐ろしさを風化させたくない』との気持ちだった。震災から10年、20年と経過しても、300回、400回と続けてほしい。それが風化防止につながる」とエールを送る。

本年度はコロナ禍での予定変更もあったが、感染対策を施して伝える機会を守った。現在のメンバーは震災時に小学2年生で、同班の実演会を見て育った世代。震災時に津軽石小の裏山に避難した山崎優人さんは「津波の1カ月前に実演会があり、先輩たちが言っていた通りの津波が来た。避難はとてもスムーズで（実演会が）生かされていたのだと思う」とうなずき、命を守る教えを次につなぐ決意をにじませた。

激励に駆け付けたOBの荒矢芳楠さん（左から4人目）を囲み、200回目の実演会に向けて打ち合わせする津波模型班の生徒ら＝宮古市赤前